

「知ることは必ず善か？」

2014年1月13日(月・祝)

会場：Alba Cafe (外苑前)

参加：16名

司会・文責：堀越

1. 概要：

- ・新規参加者3名を含む総勢16名で、「知ることは必ず善か？」をテーマとして、なぜ知ることが善と思うのか、秘密についてはどうか、について主に対話し、考えた。

2. 対話：

(0) テーマについて

- ・一般的には「知ること」は知識量の増加を意味し良いこととされているが、どんな場合でもそうなのかを考えてみたいと思い、テーマとした。*) ここで善とは、「良いこと」くらいの意味で対話を進めた。

(1) なぜ知るとは良いのか？

- ・「知ること」の後で、その人の行動や考え方に変化が起き、その変化が良いとき（つまり、その人のその後の人生に何らかのプラス方向のフィードバック（変化）を行えるとき）に、その「知ること」が良いことと言えるのではないか。
- ・ただ、際限なく知ることの量が増えていくと、選択肢の数も増えていき、その場合には判断するときに迷ってしまうため、一概に良いこととは言えない場合もあるのではないか。人は、選択肢の数が20にもなると選べなくなると言われている。

(2) 知らない方が良い（幸せ）とは本当か？

- ・確かに、特殊な場合には知ることが善とならない場合がある。例えば、配偶者が誰かと不倫をしているとき、身近な親とは血縁がなかったというとき、自分の命が残り僅かしかないというとき等。
- ・そういう場合でも、やはり真実を知ることによって、自分のその後の考え方や行動を良い方向へ持っていけるなら、善なのではないか。
- ・それが正しいなら、何かを知った後の考え方や行動を変えることができないときには、その「知ること」は良いことにはならないということになってしまうが、それには多少違和感がある。知った後の考え方や行動を変えることができるかできないかは、知った後でないと分からないはずだからである。

(3) 中味が嘘でも「知ること」は良いことか？

- ・情報の発信者として嘘を付くことは悪いとしたら、嘘を知らせること（広げること）は悪いことになる。そのときでも、その嘘を知るとは良いことなのか。悪いとは言えないが、良いこととも言えないのではないか。
- ・その視点は、発信側と受信側を混同していないか。情報の信憑性はいつでも付きまとう問題だが、信憑性が低くても知るとは良いことかもしれない。
→この対話では、「知らせる側」ではなく「知る側」に焦点を当てている。
- ・さらに、「知ること」と「知る中味」とは別に吟味されるべきではないか。
→その通りだが、厳密に区別して吟味することが大変難しそうである。
- ・不倫等の裏切り行為を隠すことはそれ自体で悪であり、その後の人生へのフィードバック（＝結果）とは関係ない。裏切り行為を隠すこと自体が裏切り行為であるからである。また、知ることによって仮に不幸せになったとしてもそれは結果であり、知るという行為の方だけで判断すべきで、それは善であると思う。

(4) 秘密は悪いのか？

- ・「知ることが特殊な状況では悪となる」可能性を探るため、進行から以下を提起した。「知ること」が必ず善として考えてみよう。すると、「他者には知らせない」つまり「秘密を持つこと」は必ず悪となってしまうが、本当だろうか。
- ・秘密は、知る人と知らない人との間に垣根を作り、双方にそれぞれ優越感（プラス）、劣等感（マイナス）をもたらすが、その双方を含む全体で見ると、秘密を持つことは良いことではないのではないか。
- ・秘密は必要なときがあるかもしれないが、良いか悪いかを問えないのではないか。

3. まとめ：

- ・難しいテーマであったが、知ることがなぜ良いのかから考え始め、秘密まで対話を深めることができた。
- ・「知る」という行為の善悪判断には、「その知る行為の結果としてもたらされるその後の人生への変化がプラス方向かどうかで決まる」という要件が提起されたが、今回対話を深めることができなかった。次の機会に取り上げたい。